

草津市立矢倉小学校通信 令和4年1月17日 NO.16



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

思いをとどけ、わかち合うあいさつを

あいさつは自分からするもの。おはようも、こんにちは、さようならも、あいさつされてからするのは、あいさつでなくて返事だ。そのようにウチの子たちには言い聞かせているんだけど、どうも響かない。近ごろの子どもは、ますますあいさつをしなくなった。寒くなってきたからだろうか、コロナのせいだろうか…。

知人の嘆きである。あいさつを巡って、あれこれ話をしたときのこと、「あいさつをされてからするのは、あいさつでなくて返事だ」この言葉が、それ以来、妙に心に残っている。話をしながら、矢倉の子どもたちにこのことを重ねてみるとどうなるだろう、とそんなことを考えていた。あいさつが先にできれば、あいさつしたことになるという理屈なら、二人いればどちらか一人が、多人数いてもまっさきにあいさつをする子が一人いるだけで、ほとんどの子は、確実にあいさつをしていないことになる。これだと、あまりにもかわいそうではないかと…。

たとえ遅れて発しても、なるほどこれはあいさつだと受けとめられる、そんなあいさつはないものだろうか。

年が明け、3学期は、雪がちらちら舞う中での登校となった。2学期末の下校時には、「さようなら」と「よいお年を」と、そんなあいさつが、あちらこちらから湧きたつように発せられていたのと比べると、どうも具合が悪い。ほんとうに同じ子どもたちなのかと、疑いたくなるくらいに、しずしずと歩を進める3学期初日だった。もちろん、明るく元気に「おめでとうございます。3学期もよろしくおねがいます。」「おはようございます。」などと、それこそ私より先にする子もいるのだが。

そんな中、一度、私の前を通り過ぎて、急いで引き返してきた子がいた。何か落とし物をしてしまったのか、忘れ物をしたことに気づいたのかと心配していると、耳元で、こっそりと告げてくれたのはこんな言葉だった。「校長先生、あした、誕生日やねん。」そしてくるりと背を向け、昇降口へかけていった。

上級生と一緒に、分団登校で私の前を通るとき、その子にとっては、「おはよう」とか「おめでとう」とか、そんなあいさつをするかどうかはどうでもよかったのだろう。あすは自分の誕生日だという、そのうれしさを、どのタイミングで伝えようか、このことで頭の中はいっぱいだったに違いない。あいさつができる、できないと、もやもやしている私の姿勢が情けなく思えてきて、自然とうれしくなった。

相手より先に発するようにすることは、もちろん大切な流儀である。同時に、遅れてでも、伝えたい大切な思いを言葉にしていく、そんなやりとりができるのもあいさつではないだろうか。いつも同じ顔ぶれで、いつもとおなじ朝と帰りのあいさつの中に、心を通わし合い、いっしょによるこび合えるような、そんなやりとり。相手を気づかう言葉かけやしぐさ…。こうしたことを大切に受けとめ合えるようにしたい。